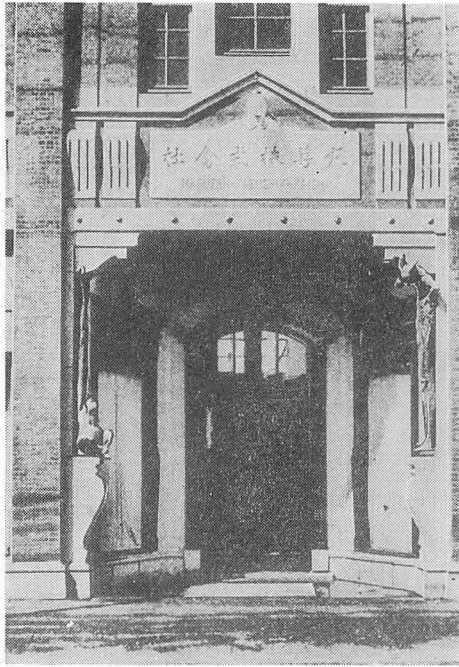


第二章 大正初期の社況

一 商品の国産化

「白樺」の創刊は、明治四十三年四月で、所謂幸徳秋水らの大逆事件がおこる一か月前であった。大逆事件とは天皇暗殺被疑事件として、首謀者と目された幸徳秋水が、神奈川県湯河原温泉で捕えられたのを初めとして、これと関係すると見られた社会主義者の一群が逮捕された。そして裁判は公開禁止のまま年末に結審となり、翌年一月、二十六名の被告中十二名が死刑、十二名が無期（初めは死刑、翌日減刑）、二名が有期刑の判決をうけた事件を云う。評論家白井吉見はこの事件を以って大正文学の発端とし、その「大正文学史」の中で次のように述べている。

「白樺」創刊が大逆事件の一ヶ月前だったということ、そしてこの事件を、同時に明治天皇の死を、更に乃木大将の殉死をこのように受けとめた新しい文学世代によって創められたということは、注目を要する事実である。個人を生かすことが、直ちに普遍的な「人類の意志」（これは武者小路の常用語であった）に合致し、個が直ちに普遍に直結するという立場から、国家や社会や歴史を捨象した武者小路を中心として、まったく新しい性格の文学が、大逆事件とならんで現れたということ、ここにわれわれは、「三田文学」「新思想」の創刊とともに、大正文学の出発点を認めないわけにはいかない。



赤煉瓦社屋入口の手長足長の二像

「白樺」創刊とその活動については木村毅博士が前編に於いて詳述しているからこれに譲るが、大正年間、日本橋通りの一角に赤煉瓦建築の偉容を誇った丸善本社落成が、明治四十三年五月で、「白樺」の誕生と、奇しくも期を一つにしており、その「白樺」と、丸善の美術書販売との間には深い関係があるから是非これだけは記しておかなければならない。

ところで先ず丸善の方に眼を転じて見ると、当社は商況の好転に連れて、通三丁目の本店営業場が、ようやく手狭になったので、四十年五月ごろから盟約者会議を開き、新社屋の建築について協議を進めていたが、たまたま同年六月市区改正のため営業場の敷地のうち二百十二坪が東京市に買収されることになったので、急遽改築の必要にせまられた。そこで、その年の十二月二十二日から工事に着工、明治四十三年春に建坪百五十坪鉄骨赤煉瓦造り四階建我国最初の鉄骨建築が竣工した。この工事中の明治四十二年十二月十日に仮営業場が隣家からの類焼の厄にあい、帳簿の大

部分と貴重な商品を殆んど灰燼に帰した。これらについては、凡て前編で詳述しているから、こゝではこれを省くが、たゞ正面入口の両側に設けられた、新海竹太郎作の手長足長の間人像については、今まで確たる資料がなかったためにその由来が知られていなかった。ところがたまたま本編を起草するに当り、金沢末吉所蔵品よりこれを知る手懸りを得たので今こゝに付記しておく。即ちこの長脚長臂の奇人については、当日新築落成記念として高級社員に頒布された花瓶の箱書に明記されている。それによると、

自 祝

山海経の長脚長臂は何れの国なるやを知らず、我が長脚子は希臘神話のヘルムスに擬して商業交通嚮導敏活を表徴し、長臂子はダイオニサスに像りて親睦快樂円満富饒を示現す、庶幾くはダイオニサスの如く善く樂みてヘルムスの如く慧あれ、

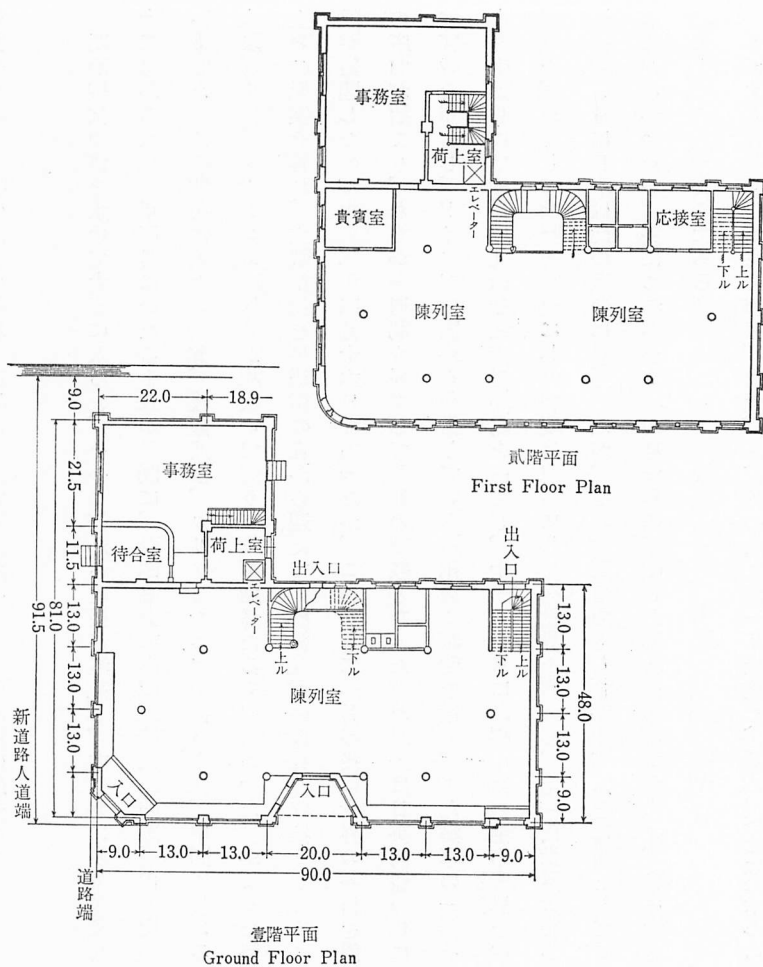
聊か新築記念として之を諸君に頒つ、

明治四十三年五月一日

丸善株式会社

と記されている。在りし日の面影を想像して貰おうと思い、特にその写真を挿入しておいた。

むかしの銀座は当時としてはモダンな赤煉瓦の家屋が軒をつらね、柳並木の緑と対照的な色感を誇っていたが、それも京橋までで、所謂日本橋区に入るこの橋の以北ではそういった景観がなかった。それが丸善の出現によって、この通りの略々北端に近い処にピリオッドをうったかのような感じを与えたのは、銀座に対するレジスタンスでもあり、何か皮肉にも思われた。いずれにしても新社屋は旧営業場の、倍以上の延坪数を擁し、一階は洋品、文房具、



赤煉瓦社屋の設計図 (単位 尺)

和書の売場、二階は洋書の売場、三階は事務室、四階はストック置場に配分された。

明治聖代の跡を承けて大正に入ると、その当初から政情が混乱し、内外共に多事多難な様相を示した。即ち元年十二月から大正三年四月にいたる十五か月間に、西園寺公望内閣、桂太郎内閣、山本権兵衛内閣、大隈重信内閣と四遷した。此の間明治天皇の大葬、護憲運動、カリフォルニアの排日事件、中国に於ける日本人被虐事件、台湾独立陰謀事件、シーメンス事件等が相次いで起り、物情騒然たるものがあつた。かような時局に直面し元老會議は井上馨の発案を容れ、大隈重信を早稲田の森から迎えて、紛糾乱離の政界を收拾せしめることに決したのである。大隈が組閣したのは大正三年四月十六日であつたが、これから二か月半後に世界の耳目を聳たしめる第一次世界大戦の序曲が始まり、わずか一週間も経ずして英独の交戦となつた。わが国は日英同盟の約に従い、八月二十三日に對独宣戦を布告し、ドイツが中国から租借している膠州湾に師団を送り、また海軍の一部を南太平洋に出動せしめ、十月十九日には赤道以北の独領南洋諸島を占領し、十一月七日には膠州湾の港市青島（ちんたう）を占領して山東半島を全く制圧した。かくして欧州を舞台にした戦塵は忽ちにして全世界を席捲し、第一次世界大戦が起つたのであつた。先に述べたように日本は此の戦争に参加したが、その期間は極くわずかで、あとは主として兵站基地（へいたん）の役割を務めたのに過ぎなかつたが、実はこれがわが国の經濟界に及ぼした影響は極めて重大で、良い意味でのインフレーションが、澎湃（ほうはい）として起つたのである。

わが丸善は、独逸からの書籍、新聞、雜誌等の輸入が一時杜絶し、その反対に英米から輸入する書籍、文房具、

洋品類の原価が著しく高騰したため利益が減少した。然し欧州の生産機能が全面的に破壊されたことが、わが工業界の發展を促し、丸善もまた好況の波に乗って、極めて順調な發展を遂げた。今その時の様子を知るに足る広告文があるから茲に掲げておこう。

歐洲に大戰突発して数旬、我国も亦剣を按じて起つに至り、戦局今や益々拡大し、対外貿易は殆ど杜絶するに到り従来輸入品に拠って需要を充したりし製品は急激なる暴騰を為し然も尚、今日の状勢を以てすれば平和の克復何時なるや予測し難く、日ならずして内地市場に歐洲製品を見ざるに至る可しと存候。此際我国工業製造家諸氏は須らく努力発奮して、輸入品の内地製造を行ひ外国品を市場より駆逐し平和克復後再び輸入の必要を見ざらしむる所謂転禍為福の計を立てざる可からずと存候。此意味に於てか欧米製造工業に関する参考書の御照会頻々たるを以て、弊社は急遽在庫品目録を作製し学燈の附録として御手許迄差上る事と致候。尤も該目録中に記載のものは孰れも現在数部を有するものに有之当分品切と相成る間敷と存候へ共、其等の惣ては常に多大の需要有之のみか、戦乱に累せられて今後の補充も予め御請合申兼ねる次第に候間御入用のものは何卒速に御注文被下度候。

〔学燈〕 大正三年九月号

こういうように袴をつけた堅い文章で、書籍輸入の困難を顧客に訴えているかと思うと、また次に掲出するように、至極軟かい文句で這般の事情を述べている場合もある。即ち、「陳列場の一隅」という題名で、

お客様「此頃本が来ないさうだね？」

店員「そんな事ありません。尤も独逸や仏蘭西の本はイクラが減りましたが、来ないといふよりドダイ出

版数が減ったのです。独逸あたりは平生の十分の一にも達しない位です。夫も戦争物や戦争に関係した古いもの、重版が多いので、出版業は殆んど休止の状態です。夫から最^も一つ厄介な事は、独逸では新聞雑誌を初め医学とか化学工業とか云ふやうな敵国の利益になる書籍の外国輸出を禁じましたので——尤も表向きは禁制になってゐても矢張註文すれば来ますが、左に右く表向きを禁止されてゐると自然来ない場合が多くなります。其上に最一つ困難な事は、連合軍の封鎖が此頃益々厳しくなつて、独逸から荷が出せないばかりでなく、独逸へ送る註文書が屢々途中で抑へられて了ひます。中立国の取引先きや独逸商店の手を通じて種々方法を講じます、一日増しに段々と取引が難かしくなります……」(「学鑑」 大正五年四月号一三頁)と。

尚その様相を数字の上から見れば、大正五年以後五年間九期の純益、株主配当率並びに増資の状況等が如実に示

しているから次にこれを表示しておく。

年 度	純 益 金	株主配当率	資 本 金
大正五年前半期	一四万余円	一・五割	五〇万円
大正五年後半期	一五万余円	二・〇	五〇万円
大正六年前半期	二二万余円	二・〇	五〇万円
大正六年後半期	二四万余円	一〇・〇	一五〇万円
大正七年前半期	二二万余円	二・〇	一五〇万円
大正七年後半期	二八万余円	二・〇	一五〇万円
大正八年前半期	三〇万余円	二・五	一五〇万円
大正八年後半期	三四万余円	三・〇	一五〇万円
大正九年前半期	六〇万余円	五・〇	三三〇万円

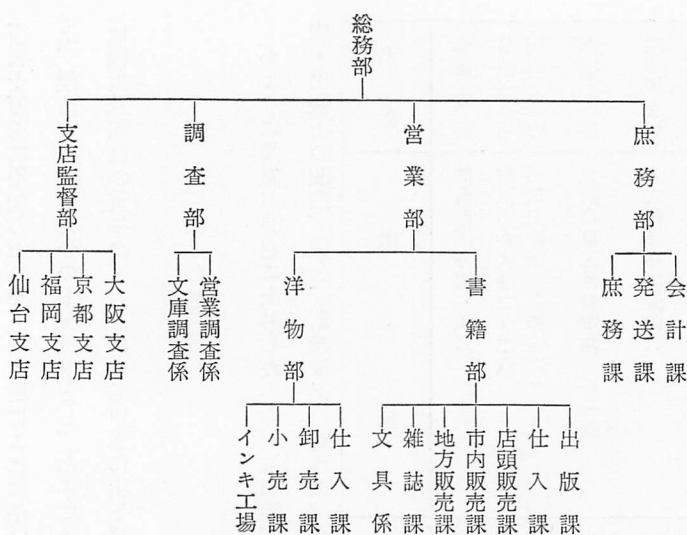
これを見てもわかる通り、純益金は順次増大し、本表以後の大正九年の後半期が二九万余円であつたのを除いては大正十二年の前半期に至るまで、いずれも三三万乃至三六万円を示し、株主配当率は二割を堅持した。また資本金も大正九年八月の臨時株主總會で、一挙に二倍以上に当る百八十万円の増資が決議され、七回の分割払込みを経て、昭和四年九月全額払込みが完了され、約十年間に六倍半の三

百三十万円に増加したのである。更にこれに伴い純益金の処理方法も改められ、大正五年には積立金を百分の五以上、役員賞与金を百分の十五以下とし、七年には新たに職員慰勞準備金を設けて、百分の五以下を積立て、十年には役員及職員の賞与金を百分の十五以下に引下げた。

二 機構の整備

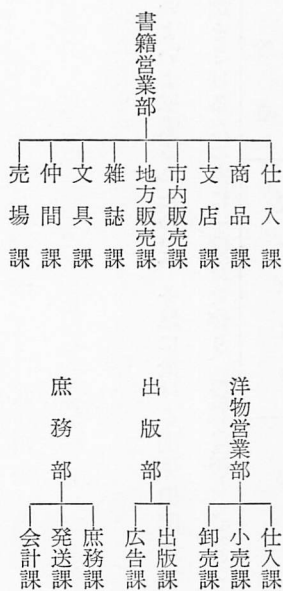
かように業態が急速に上昇したから、取引範囲もいよいよ拡張されたので、各地に於ける関係機関の整理、支店・出張所の改造、併合、新設等が行われた。今、煩をさけるため左に一覽表を作り、要領を示しておこう。

名 称	所 在 地	主 管 者		設 立 年 月 日	備 考
		職 名	氏 名		
仙台支店	仙台市国分町一六八	支店長	館村甚治	大正五年二月一日	大正四年七月出張所設置五年二月支店ニ昇格
横浜支店	横浜市弁天通二ノ二八	支店長	藤倉八郎	大正九年十月一日	丸屋書店買収
神田支店	東京市神田区表神保町二	支店長	伊村金之助	大正九年十月一日	中西屋書店買収 明治二十六年丸屋書店買収 大正十二年二月支店ニ昇格
大阪支店	大阪市東区博労町四ノ一一四	支店長	八田庄治	大正十年十一月二十六日 新築開店	
名古屋支店	名古屋市中区栄町六	支店長	伊藤四良	大正十一年二月二十四日	名古屋丸善商店ヲ買収
札幌出張所	札幌市北八条西四ノ二	所 長	平原暹三郎	大正十一年十二月十八日	
三田出張所	東京市芝区三田二ノ一	主 任	中村春太郎	大正十二年四月二十四日	
丸の内売店	東京市麴町区丸ノ内二ノ一丸ビル内	主 任	須賀正寿	大正十二年三月十日	



さてこのように資本が増大され、支店・出張所が整備されると、これに対処するため本社の組織の改善が必然的に要求されるようになった。即ち明治三十五年頃初めて処務規則草案がつくられてから、時流に沿って再三改正が行われたが、未だ充分とはいひ難かった。そこで大正四年五月に至り、徹底的な改組が行われ、庶務部、営業部、調査部、支店監督部の四部制を採った。その詳細については「丸善社史」二〇八頁以下に委しいから上表に転載しておこう。

その後大正九年四月再び組織を改め営業部、庶務部を残して他部を廃し、出版課を部に昇格した。(下表)

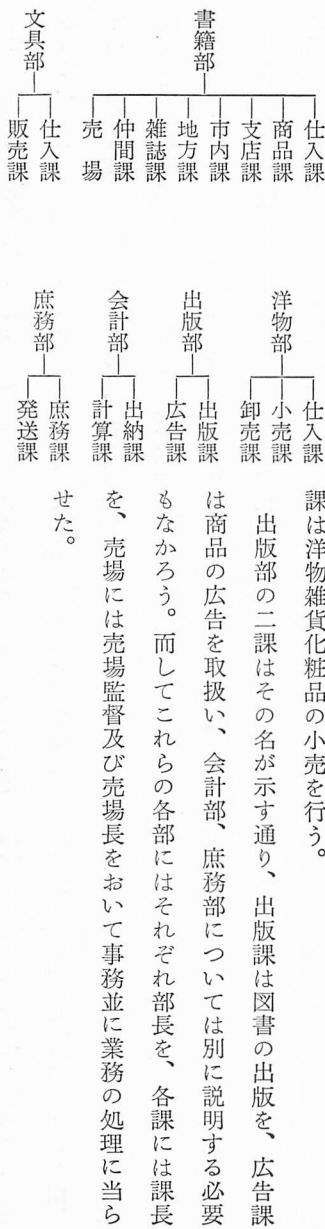


次いで同十一年一月に至り、書籍営業部及び洋物営業部を、それぞれ書籍部並に洋物部に改め、更に書籍部に含まれてい

た文具課を昇格して文具部とし、その下に仕入課、販売課の二課を、また庶務部の中に含まれていた会計課を会計部に昇格、その下に出納課、計算課の二課を置いた。この改正によって部は六つに増加したわけで、これを表示すると次の通りである。今その各課について簡単に説明を加えてみよう。まず書籍部に属する仕入課は、外国で出版された図書の注文及び仕入事務を、商品課は外国書籍の調査、注文量の決定及その保管を業務とする。支店課は支店と本店との間で商品受け渡しに関する事務をとり、市内課は図書及び新聞雑誌の市内販売を、地方課は外国及び地方の販売を取扱い、雑誌課は外国で発行する新聞雑誌の仕入・予約販売を行い、仲間課は国内の同業者との取引と商品の保管をなし、売場は店頭における販売を取扱う現業で特に課とは云わなかった。

文具部の仕入課は文具の仕入保管及び支店の文具に関する事務を、販売課は文具の販売に関する事務を取扱う。

洋物部の仕入課は洋物雑貨化粧品類インキ等の仕入と支店への配給を、卸売課は洋物雑貨インキの卸売を、小売



これら数回の組織改正が行われた当時の重役陣の変動については、已に前編十八章（七四九～七五〇頁）で概説されているが、再びこれを取上げて見ると、大正五年一月二十四日の定時株主総会に於て、小柳津要人は取締役を辞し勇退を表明したためこれを認め、更に相談役を設置することを決して、小柳津要人を相談役に推した。小柳津要人の専務取締役辞任の後、中村重久が代って専務取締役に就任し、又取締役欠員のため新たに松下領三が取締役に就任した。小柳津要人はその後約五年余り相談役として丸善の発展のために尽し、中村重久はその任にあること僅かに三年に満たずして死去した。そこで大正八年一月二十四日取締役山崎信興が社長に、取締役松下領三が専務に、新たに荒川実が取締役に就任した。

なお、明治二十六年の定款には、取締役はその互選によって専務取締役又は社長一名を選定すべしとあるが、都合によって社長は選定しないことがある旨の但書が附されていた。そのため二十六年以後社長は全く置かれず、専務取締役によって統轄されていた。そこで中村重久は、実質的には第四代社長に相当するので、一応その履歴をここに挙げておく。

すなわち彼は安政六年三月三日三河豊橋藩士中村広蔵の三男として生れ、明治三年四月藩校時習館に学んだ。卒業終るや十年五月豊橋第八国立銀行に入社したが、間もなく同年横浜に出で、融智商社に入社、越えて十九年五月十八日松下包次郎かねの紹介により唐物店入社、唐物店帳簿通信係に就任した。二十年七月六日、勝田（金沢）幸次郎の後を承け唐物店支配人心得を拝命するや、奥羽・北海道地方販路拡張のため努力した。二十八年丸善の財政整理を主張し、早矢仕有的、松下鉄三郎、小柳津要人等を説得してこれを実現せしめた。三十三年取締役就任、四十五

年一月には処務規定改正を断行すると共に総支配人に就任、大正五年一月二十四日専務取締役（第四代社長）となったが、病を得て大正七年十二月二十日他界した。

新たに社長に就任した山崎信興は、安政四年九月二十三日、福島県棚倉藩士佐々木武八の次男として生れ、慶応二年国替により川越へ移り藩校で漢学を学んだ。明治十年西南戦争に志願して出征し四国地方警備に従事した。その後十三年九月上京して開興商社（新燧社）入社、会計事務を担当したが十五年十一月四日開興商社解散により丸善入社、初め外国貿易事務を担当し、引続き唐物店帳簿及び通信係、横浜唐物店を担当、輸入係、唐物店輸入部専任を歴任して三十六年二月十日取締役就任、四十五年には営業部長をも兼ねたが、大正八年一月第五代社長に就任した。

三 独自の社格



山崎信興（五代社長）

さてこの^{あた}辺りで筆を^す枉げ、社員の取扱いについて一言述べて見よう。一体、家に家風がある如く、店には店風、会社には社風と云うように、自然に具わった風格がある。創始者の人格がそのまま店なり社なりの格調に反映するもので、幾代かの永い伝統を持った家には^{まろ}牢固とした家風が出来てしまうが、草創いくばくもたないものでも、当代店主の人格が、そのまゝ店風になってしまふものである。丸善の店風は勿論創立者早矢仕有

的の指導精神が、その基盤となり、抱負経綸が店員の日常を左右した。尤も有的は、初めから商売人ではなく、福沢諭吉の勧めによって店を開いたのであるから、福沢の影響をうけていることは確かであるが、有的は有的なりに店員を訓練したのは勿論のことである。そして初め学を求めて福沢の門に入ろうとした篤学者であったから、同業の他店主とは、自からその趣きを異にしていた。それが丸善独特の店風、社格を生み出し、従業員の誇りにさえなったのである。

従業員の雇傭は、従来の慣習に従い徒弟制による。即ち年期奉公である。徒弟には厳に階級制が布かれ、まず丁稚・小僧から出発し、一定期間を経て手代になり、更に進んで番頭に昇格するのは、名実共に型通りである。山崎豊子の小説「暖簾」は大阪商人の徒弟制を、いみじくも浮彫にしているが、この大阪商人の慣習が手本となり、殆んど凡ての業者がこれに倣った。従って丸善でも見習期間とは言え就業時間は定まっていたが、その時間内で店頭の清掃はもとより、先輩店員の蒲団の上げ下しから使い走りに至るまで、凡そ雑用という雑用全般に従事した。三年間の見習期間が過ぎると前垂をとり、羽織が与えられて手代になる。その後の期間は別に定まっていなかったが、大體勤務状況によって番頭になり、妻帯したものは自宅から通勤するようになるのも型通りである。普通、初めの見習期間の名称は丁稚或いは小僧と呼ばれていたが、丸善ではこれを見習生と呼んだ。即ち有的の学者的風格が、丁稚・小僧の呼び方を捨てさせたのである。そこには主人対雇傭者と云う考え方が払拭され、宛も子弟関係が結ばれているかのようにであった。古老間宮不二雄の話によると、むかしは社員食堂というものがあり、みんなそろって其処で食事をするのが慣例となっていたが、社長が大きな飯櫃の側に坐った時は、一人一人の茶碗に御飯をつけるこ

ともあった。店の發展は店員の働きによるものであるという感謝の現われなのだろうか。有的らしいところがあるといえよう。尤も賄をしていた通称弁さんが辞めた明治四十年以後は弁当を新場橋際の大野屋より取り寄せるようになった。大正七年ごろの食費は一日二十五銭であった。その他少し贅沢だが、早川という牛肉屋から牛肉弁当を取り寄せて栄養の補給をしたものである。この弁当代が二十銭で相当高いものであったから、そう何回も喰うわけにはいかなかったが、それでも黄色の四角な箱に御飯の上に海苔を布き、その上に肉と卵がのっけていて大いに食欲をそそったものであると云う。月給は凡て階級によって差が設けられ支給されたが、食費を差し引いた残りの全額は庶務係が保管していた。

無駄づかいをさせないと云う社長の教育方針から出た処置であった。そう云えば祝祭日などの休日に外出する時、庶務から五十銭を貰い小遣いにしたが、残りが出た時は、それを庶務係に返さねばならなかった。



前垂れ姿の見習生

社員が外回りをする時には、電車賃三銭と、弁当代六銭（うどん三杯分）が支給されたが、大学へ行く時は御用車（うしや）を乗り廻すことが出来たと云う。こう云う処にも有的らしい味が出ていて微笑ましい。御用車と云えば、丸善本店の筋向うに人力車宿があり、安兵衛とその弟の二人で経営し、女房はアルバイトに社員の汚れものを洗濯していた。因に猿股一枚一銭、シャツ一枚が一銭五厘であったという。

なお大正十年頃の「見習社員応募者案内」と云う、微に入り細に涉った書類が発見されたから、参考のためここに挿入しておこう。

見習社員応募者案内

東京市日本橋区通三丁目 ㊦丸善株式会社

本年も愈々皆様の御卒業期となりました例により皆様の中から年少社員を募集したいと存じましてこの入社案内を御手許まで差上げます。御父兄先生方と御相談の上御申込を願ひます。

㊦丸善の概要

当社の創業は明治二年一月で日本に於ける会社としては最古のものです、早くから洋書や洋品雑貨、文房具等を輸入して欧米文化の紹介と普及に努力して爾来数十年間一貫して進んで来た結果今日の堅実な基礎を築き上げたのであります。そして社運は年々発展し今では全国に亙り十二ヶ処の支店及び出張所があり現時の營業科目は和洋書籍文房具、洋品雑貨及び化粧品等で特に洋書の販売やインキの製造では東洋第一の評さへ受けて居ります。

㊦志願者の資格

一、尋常小学校又は高等小学校を卒業し数へ年十六歳までの身体健全の男子にして永く勤続の出来る者
一、確実の保証人二名を立て得らるる者

(内一名は東京市内又は府下に住み一定の職業を有する戸主)

◎申込手続

一、申込者は左記書式の自筆履歴書に卒業当時の通信簿（通信簿のない方は学校長の成績証明書）を添へ当社庶務課宛に御出し下さい

履 歴 書（用紙半紙）

本籍地 何県何郡何町（村）何字何番地

現住所 何県何郡何町（村）何字何番地

戸主の職業及名、何男

氏 名

年 月 日生

学 業

一、大正何年何月何県何々尋常小学校に入学

一、大正何年何月尋常科卒業

一、大正何年何月何県何々高等小学校に入学

一、大正何年何月高等科卒業

賞 罰

一、大正何年何月何々の筋により賞を受く

右之通りに候也

大正 年 月 日

右 氏 名

◎採用方法

一、申込順に依り面会の上体格検査と簡單なる筆記試験を行ひ採否を決定して追て御通知致します

◎入社手續

一、採用に極つた見習社員は大体寄宿舎に入るのでから左記用品を準備して入社当日より使用出来得る様寄宿舎々監宛に前以て御届け置き下さい

(寄宿舎は東京市麴町区飯田町二丁目四十七番地です)

一、用品 着物(角袖木綿縞)、角帯、寢具、繻絆、烏打帽子、手拭、楊子齒磨、認印、洋傘等

◎教育及設備

一、寄宿舎にて夜間三ヶ年間専門の講師を聘して業務上必要の学科を教へます

一、特に優等にて夜学を卒業したる者には社費を以て上級の英語夜学校又は商業夜学校に通学せしめます

尚寄宿舎に於ては体操を励行して健康の保全を計り春秋の好時季を利用して遠足会を催し時々名士を聘して精神修養に関する講演会等を開いて居りますし其の外図書や娯楽の設備もあります

◎給料及進級

一、最初の給料は尋常卒業生は二十三円、高等卒業生は二十五円です

一、見習期間は尋常卒業生は普通三ヶ年、高等卒業生は普通二ヶ年で手代に昇進致します但成績の優れた方は期間内にも抜擢せらるゝ事があります

一、給料の外に毎期末に手当及び諸給与があるので入社後の費用は自弁し得ますし尚自然貯金も出来る様になつて居りますから父兄より送金等を仰ぐ必要はありません

一、社員を進級には制限がありませんから品行技能次第で順次累進し幹部に任用せらるゝことになります。

(註 この募集要項には、九段中坂の寄宿舎のことが記されているから、大体大正九年前後でなかったかと推定される。古老の話によれば見習社員はこれまで全部縁故関係から採用したが、第一次世界大戦中一般募集を行ったという)

四 夜学会の活動

丸善が社員教育のため夜学を開いたのも、大書すべき特徴と云えるだろう。年期奉公をするからには寄宿舎が必要で、本店の奥にある三階建木造の棟がこれに充てられた。それが何年頃から設けられたものかは明らかでないが、兎に角こゝで寄宿生に対する教育を施すようになったのは、明治三十七年十一月からであった。即ち一階及び二階は寄宿生の起居に供し、三階を教室にあて主として夜間に英語を教授した。先生には東京帝国大学の学生二人を招き、畳敷の上に食卓を並べ机代りにして勉強した。当時巷間にも見られた寺子屋式家塾そのまゝであった。たゞし

所謂ポストグラデュエート・コースを設け、優秀なものを選抜して英語学校・商業学校の夜間部に通学させ、青年社員奨学の道を拓いたのは特筆すべき徒弟教育と云えよう。

その後明治四十四年に至り、寺子屋式夜学を、学校組織にならった制度に改め、丸善夜学会または丸善夜学校、或いは丸善商業学校と称し、同年六月十三日に開校式を挙げた。夜学会の会長には金沢末吉が就任し、早稲田大学文学部を卒業して入社した三浦俊彦が幹事になって、その経営に当った。因に現存する丸善商業学校の綱紀は次の通りである。

綱 紀

一、操行ヲ慎ミ礼儀ヲ重ズル事

一、規律ニ従ヒ秩序ヲ守ル事

一、誠実ヲ旨トシ質素ヲ尚ブ事

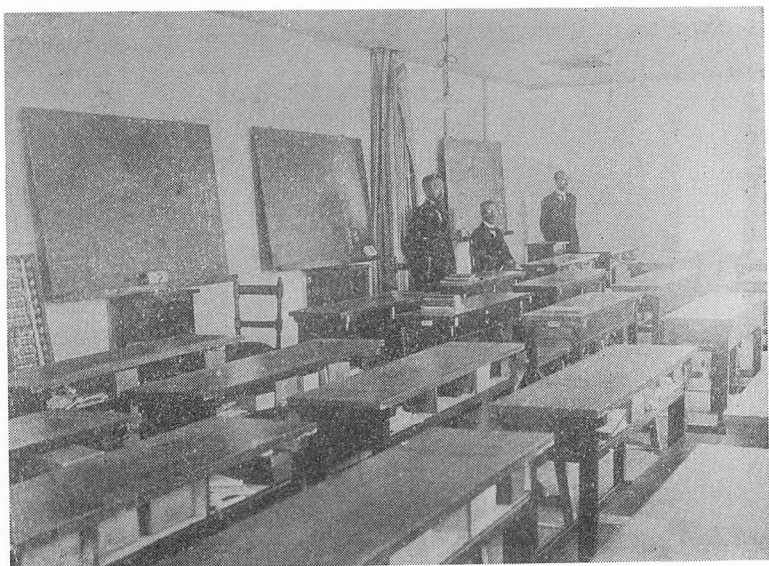
一、長者ヲ敬ヒ愛社ノ心ヲ振起スル事

一、快活ニ勤メ不平不満ノ念ヲ排スル事

大正五年一月八日

丸 善 商 業 学 校

この丸善夜学会は三か年制で、学科は時により多少の変動はあったが、商売柄英語を主とし、他に数学、和漢文、倫理、簿記、商事要項等を授けた。



夜学会の教室

開校当初は、生徒数が少なかったため一年生から三年生までを一学級に編成し、その第一回卒業式を翌四十五年四月二日の夜、会社楼上で行った。式は君が代合唱を以て始まり、幹事の学事報告、会長の訓辞、卒業生総代の答辞、生徒総代の送別辞等、一般の学校と何ら変わるところがなかった。そして優等卒業者の中四名には万年筆、その他の優等生には手帖を与え、小柳津要人の祝辞、内田貢（魯庵）等の訓辞があった後、一同に茶菓を供し飲を共にして散会した。

その後本店の事務膨張に従い、本店内に寄宿舎を置く余地がなくなったので、大正九年十月九段中坂、正式には麹町区飯田町二ノ四七の地所及建物三棟を買収し、これを改築して寄宿舎に充てた。寄宿舎の敷地は約一七〇坪（凡そ五五〇平方メートル）で、敷地一杯に三階建の木造家屋が建てられていた。この時初めて舎監をおき、寄宿生が本店へ通勤する時、並に退店の時には舎監自ら

引率して徒歩往復したものであったが、その後交通が頻繁になるにつれ、いつしかこれも姿を消してしまった。

また会社では、社員全体の知識の向上を計り、修養に資するため、随時名士を招いて講演を依頼し、社員全体に聴講せしめた。その第一回の講演会は明治四十一年四月五日、一石橋のキリスト教会堂で開かれ、以後大体月一回講演会を開催して大正九年―十年頃まで続いた。講演の内容は、商業道德、精神修養が主なるもので、時に応じては時局談も試みられた。講師も多彩で、殊に東洋大学教授中島徳蔵、同加藤拙堂、学習院教授高島平三郎、海老名弾正、早稲田大学教授安部磯雄などは数回に互って講演を試みている。この講演の速記は印刷して各支店にも配布した。大阪支店在勤当時の間宮不二雄はこの配布を受け、大いに啓蒙されたと回顧している。

そこには今流行の労資の対立もなければ、赤旗が樹^たった例^{ためし}もなかった。まことに情宜に満ちた雰囲気の中で、日^ひの業務が楽しくつづけられて行つたのである。徒弟制度は勿論封建的組織の代表的なものである。これを一概に資本主義的搾取であると目くじらを立てる必要はなからう。封建制度のうちには良俗醇厚の美風もある。現に丸善では徒弟に対する観念が子弟にまで高められていたのである。